

きゅう舎関係者の仕事と暮らし

帯広競馬場に隣接するきゅう舎地区では、五百頭を超える馬たちをレースで輝かせるため、調教師、騎手、きゅう舎務員ら約二百人が日々奮闘しています。

ばんえい競馬を支えるきゅう舎の人々

帯広競馬場の西側には、面積約六万平方メートルのきゅう舎地区が広がっています。ここには現在二十八のきゅう舎棟があり、調教師二十九人、騎手二十二人、きゅう舎務員約百人、その家族をあわせて計約二百人が、五百頭を超えるばんえい競走馬とともに暮らしています。

四市開催時代、きゅう舎関係者はレース開催日程に合わせて四市を巡回していました。拠点のひとつになったのは、帯広市単独開催が始まってからです。

きゅう舎地区は馬の衛生管理や競馬の公正確保などの理由から、関係者以外の立ち入りが厳しく制限され、外部からは遮断さ

れた特殊な環境にあります。レース開催日はきゅう舎関係者の外出も禁止されているため、この地区内で暮らしが成り立つよう、売店、食堂、共同浴場も設けられています。人と馬が隣り合わせに暮らし、子どもたちは、ここから学校に通っています。仕事場でありながら、昔ながらのご近所付き合いを思わせるコミュニティが形成され、独自の光景を生み出しています。

競走馬を育てる調教師の幅広い仕事

「きゅう舎」は馬を飼育する施設を指すこともありませんが、競馬においては、調教師が管理する組織・施設を意味します。きゅう舎を会社に例えるなら、調教師

人馬が慌ただしく行き交う開催日のきゅう舎

きゅう舎地区が活気づくのは、レース開催日。騎手は前日から調整ルームに入り、体調を管理してレースに臨みます。一日何レースにも挑むので、その間、騎手重量を維持しなければならず、食事にも気を配ります。ナイター開催日は、最終レースを終えると午後九時近く。十時には就寝し、翌朝の調教に備えるというハードスケジュールです。

一方、レースに出る馬を担当するきゅう舎務員は、出走前の馬の手入れからレース終了後の手入れまで、決められた手順に沿って馬を管理します。きゅう舎務員に引かれて装鞍所に向かう馬と、レースを終えて戻る馬。開催日には多くの人馬が、きゅう舎と競馬場の間を行き来します。

こうしていい馬を見出し、いずれは自舎に預けてもらえるように生産者や馬主と良好な関係を築くことも、調教師の大切な仕事です。

40	1R	マホトダンター	大塚
	2R	アサヒアサヒ	大塚
	3R	ホンインボウ	大塚
	4R	アサヒ	大塚
	5R	シンカウケン	大塚
	6R	アサヒ	大塚
	7R	アサヒ	大塚
	8R	アサヒ	大塚
	9R	アサヒ	大塚
	10R	アサヒ	大塚
	11R	アサヒ	大塚
	12R	アサヒ	大塚
	13R	アサヒ	大塚
	14R	アサヒ	大塚
	15R	アサヒ	大塚
	16R	アサヒ	大塚
	17R	アサヒ	大塚
	18R	アサヒ	大塚
	19R	アサヒ	大塚
	20R	アサヒ	大塚

ホワイトボードに記されたレースの予定表。



ファンの目を楽しませるたてがみの飾りつけも、きゅう舎務員の仕事。



競馬開催日、きゅう舎務員は発走2時間前から担当馬の手入れを始める。



馬房と隣り合わせの居室。朝の調教の後、午後の作業に備えて各自居室で休息を取る。



番犬として飼われている犬たちも、きゅう舎ファミリーの一員。



きゅう舎には馬の手入れ用のほかにも馬房の作業に使うさまざまな道具があり、どれも整然と並べられている。



馬房で餌を待つ馬たち。禁止されている成分が混入しないよう、馬に与える飼料は厳重に管理されている。



きゅう舎建物の1階には馬たちが、1階の一部と2階にはきゅう舎関係者が暮らす。

(写真/山岸 伸)

**早朝の調教から始まる
きゅう舎の長い一日**

きゅう舎の一日は、まだ夜も明けない時間から始まります。午前四時頃には、調教師、騎手、きゅう舎員たちが朝の調教を開始。一頭につき一時間ほどかけて、調教用のそりにおもりを積んでひかせる「ズリ引き」や障害を越えるトレーニングを行います。調教後は汗をかいた馬の体を洗い、筋肉の疲れがとれるまで、つなぎ場にとめて休ませます。きゅう舎関係者がようやく一息つけるのは、午前十時頃。その後は各自休息をとり、午後の仕事に備えます。

日々の馬の世話は、主にきゅう舎員の仕事です。若手騎手も一本立ちできるようなるまでは、きゅう舎の仕事を行います。一人四、五頭の馬を担当し、午後は馬房の掃除、馬の手入れ、健康管理などにあたります。飼いつけ（給餌）は一日四回。薬物検査が厳しいため、馬に与える飼料は厳重に管理されています。干し草、えん麦、フスマ、ハイキューブ（干し草を成形したもの）など、ばん馬が一日に食べる量は約四十キロ。給餌に備え、牧草ローラーをほぐし

て草切りをしたり、おやつ（ニンジン）を切っておくのも仕事のうちです。作業が終わるのは、午後四時〜五時頃。自分たちの夕食後、馬に夜の飼いつけをして、長い一日が終わります。

こうした日々の積み重ねが、レース結果につながります。レースで馬を勝たせるのは、手綱をとる騎手以上に、裏方で支えるきゅう舎員の力に負うところが大きいとも言われます。調教に耐えられる健康な馬でなければレースに勝つことはできないため、馬の健康管理を任されるきゅう舎員の役割は重大です。きゅう舎によっては定休日が設けられていますが、馬の世話に休日はありません。まさしく馬中心の日々。馬が好きでなければ務まらない仕事です。

レース非開催日のきゅう舎の仕事*

※きゅう舎によって多少異なります。

4:00頃～	調教準備（馬装具装着）、調教、調教後の汗取り、クーリングオフ、朝の飼いつけ
10:00頃～	休息
11:30頃～	昼の飼いつけ
13:30頃～	馬房の清掃、馬の健康管理、餌の準備（草切り、ニンジン切り）、競走用具の点検、夕方の飼いつけ
20:00頃	夜の飼いつけ

**きゅう舎関係者の使命は
強い馬を育てあげること**

普段の仕事に加え、春先には新馬の調教が始まります。牧場から来たばかりの二歳馬に装具をつけ、そりをひかせる訓練を施すのは容易ではありません。馬の個性や能力を見極め、それぞれに合った調教が求められます。ここで見誤ると、その後の競走馬としての成長に大きく響くので、一瞬たりとも気が抜けません。

「馬の能力を引き出し、強い競走馬に育てあげていくのが、きゅう舎関係者の使命。目指すのは、最高峰レース・ばんえい記念です。まずは、ばんえい記念に出走できる馬を育てること。さらに次の目標として、ばんえい記念「優勝」の栄誉を勝ち取る」と、服部調教師は語ります。生産者から馬主へ、馬主からきゅう舎へと託されたばん馬を頂点に立たせるために、調教師も騎手もきゅう舎員も、日々努力を重ねています。



きゅう舎員はひとり4～5頭の馬を担当。新馬の時期にはさらに増えるので、調教時間も長引く。



午後は馬を馬房から出し、つなぎ場で日光浴させている間に馬房を清掃。



牧草ローラーをほぐし、機械にかけてカットする草切り作業。

きゅう舎で見かけるばん馬専用の道具たち

ばん馬は体が大きだけに、手入れも大変です。きゅう舎関係者は、ばん馬用にさまざまな道具を編み出してきました。例えば、ばん馬用の掃除機。これは業務用掃除機に長いホースをつなげ、特殊な吸引口を取り付けたもの。この吸引口の金ぐしは、もともとは手作りしていたそうです。馬の毛をすく通称「クワ」と呼ばれる道具も、最初は本物のクワをサンダー（研磨工具）で磨き、溝の深さや角度を工夫して作っていたもの。また、調教やレース後にばん馬の体を洗う際には、洗車用の洗浄機が使われています。



金ぐし
ばん馬は毛が硬く、皮膚が丈夫なので、「金ぐし」でこびりついた汚れや汗をとる。輪が小さいほど抵抗が大きく、すきやすいのだそう。



すきぐし
たてがみや尾をすく時は、特製の「すきぐし」を使用。



クワ
馬の毛をすき、フケを落とすための通称「クワ」。溝の深さや角度を工夫して現在の形状に。



掃除機（特注）
業務用掃除機を改造したばん馬用掃除機。吸引口の金ぐしもばんえい特注。



朝の調教だけで優に5～6時間。早いきゅう舎は午前2時頃から始めるという。